

女性技術者からひとこと

応用地質㈱東北支社 岩 部 良 子

私が大地という物に興味を持ったのは、小学校の低学年の頃だったと思います。自宅のトイレに貼ってあった世界地図を、毎日のように見ているうに、隣同士の島（当時は大陸だとは知らなかった）の湾岸線の形が似ていると思い、島をパズルのようにくっつけられそうな気がしたのでした。こんな事を考えたのは、毎日同じ物をボーッと見ていたせいだろうと思います。ちょうどその頃、学研の科学という子供向けの雑誌に、ウェグナーの大陸移動説が面白く紹介され、私は子供心に大いに納得したのです。

その後、中学生のころに「私のように地形から湾岸線の形が似ていると考えた人は意外と多く、特にすごいことではない。けれど、その仮説を証明するために人生をかけた人がウェグナーさんなのだ。この人はただ者ではないに違いない!?'という事に気が付いたのでした。中学生の頃の私にとっては、自分の考えを証明するために人生をかけるという事は、探検や冒険と同じ非日常的な夢の世界に思えました。

次に私は“地球を科学したい”と思うようになったきっかけを話します。それは、

中学2年生の理科の授業でキュリー点の説明を受けた時のことでした。私の中で今まで信じて疑わなかった「地球は磁石だ」という知識と「地球の中心はマグマが詰まつていて高温だ」という知識が、キュリー点の存在によって両立しない事に気が付いてしまったのです。私は、数週間悩んだ末に、まず両親に相談しました。答は、「何の役にも立たないことで悩んでないで、手伝いか勉強をしなさい。」でした。次に相談したのは、中学の理科の先生でした。先生は興味を持ってくれ、参考になりそうな本の探し方を教えてくれました。図書館で本を探し、ダイナモ原理と言うよく分からぬ原理で地球は磁化しており、大きな磁石が地球の中に入っているのではないことを知りました。地球がどうして磁化しているかは、現在も研究中であるという事を知ったとき、「何の役にも立たないこと」を大の大人が人生かけて研究していると言う事実に、すごく惹かれてしまいました。そのとき、「こんな研究をしている人たちの中にいたら、きっと素朴な疑問に、まじめに答えてもらえるだろう。」と科学者がすごく身近な存在になりました。

中学3年生の時には、Dr.スランプアラレちゃんがはやっており、“ギャオ”という地名が出てきて、アイスランドのギャオは地球の“オシリ”と書いてあるのを読み、地球深部のマグマが湧き出している“ホットスポット”なるものがあることを知り、すっかりギャオのファンになっていました。

こんな単純な経緯で、私は「地球を科学する人になって、自分の中にある素朴な疑問に答を見つけて行きたい」と夢みるようになったのです。

話は遡りますが、小学校の低学年の頃、関東山地の入り口にある高尾山の麓の自然豊かな中で育った私は、山の緑や動物が大好きでした。小学3年の時に都内に引っ越ししてからも、土いじりや、よその家の庭の草木を見てボーッとしているのが好きでした。そのため、子供の頃は、自由に野山を歩くにはどうすれば良いだろうと、山に行くもっともらしい理由をよく考えていました。山に帰りたいと思っても、仕事で転勤して歩く家だったので、帰る所はなかったので、よけい高尾の山が恋しかったのだと思います。

そんなこんなで、大学では理学部地球学科に席を置き、山でのんびり森林浴をしたい一心で、地質を選考しました。地質を選考するか決める前に、わざわざ教授に山を歩かせてくれるか確認しに行ったのを覚えています。山に行かせてくれないのなら、

野外系の他の学科に転科しようと考えていたのですから、野外へのあこがれは相当のものだったと思います。

大学で踏査をし、沢には滝が沢山あることを知り、その滝を巻く技術がなければ踏査結果が歯掛け状態になるという現実を知った時、「体力をつけなきゃ!!」と思い、斜め懸垂をやって腕力をつけたり、ジョギングをしたりしました。踏査が自分に向かうのでは?なんて考えてもみませんでした。やりたいのだから、出来るように自分が変わればいいはずだ!!ただそんな風に考えていました。

岸壁に巣を作る鳥の生態を紹介するテレビでは、ロッククライミングをしてカメラをセットする生態学者の様子を見せてくれていましたから、地質学をする人も必要ならロッククライミングをするのが当然だろうと言うくらいに考えていました。

その結果、大学時代を通して私は“夢に向かって歩く”という行き方は、実に気力と体力がいり、自分を変える勇気がいるのだと知りました。それでも私は、泥まみれになりながら、自然と向かい合って過ごす自分だけの時間が好きでした。だから、地質屋をやめるなんて考えませんでした。

楽しかった大学の4年間は、あっと言う間に過ぎて行きました。大学には残れないし、世間では女性を地質技術者として雇ってくれるところなんてほとんどない時代で

した。地質屋さんのそばで仕事が出来れば、おもしろい話が聞けるだろうし、もしかしたら手伝いで踏査に連れていってもらえるかもしれない。そんなわずかな希望で、地質調査の会社を選び就職活動をしました。

入って見ると、想像通り会社には女性の現場技術者はいませんでした。ただ運良く私が、男女雇用機会均等法により現場技術者として採用された、女性地質技術者の一号生だったのです。

会社に入って最初の勤務地は東京でした。2年間は土質技術課に所属していましたので、地下水影響調査のためのボーリング現場に良く行きました。現場では、開けたばかりのペネ試料が観察出来ました。開けたばかりのペネ試料では、堆積構造がしっかりと読みとれました。私は堆積構造観察するのが好きでしたから、すっかり現場が好きになり、周りの人の心配や、オペレーターの不安をよそに、現場ばっかり行っていました。

これはたぶん、踏査では確認しきれない事が多いので、穴を掘って覗いてみたいと言う願望があり、ボーリング試料を通して大地のいろいろな情報が手に取るようにわかるボーリング調査に、惹かれたからだらうと思います。

入社から9年。現在私は地質技術課に所属しており、ダムサイトの調査を主に担当しています。今でも横坑と聞くと「見たい

ところに穴を掘って自分で見に行けるなんて、地質屋にとって夢のような場所ですよね。」と、年甲斐もなくうきうきしています。

自分を、根っからの地質屋と思っても、今の所“技術者”と実感することはあまりありません。技術職として日夜仕事に励んでいるのですが、自分でなければ出来ないようなオリジナリティのある仕事をしているとは感じません。誰でも、時間をかけてじっくり考えれば出来ることをしているのだから、技術者なんてまだ言えない。もっと、勉強して経験を積めば、自信を持って自分を技術者と思えるようになるかな?と思います。

そんな私が初めて自分は技術屋なんだと実感したのは、自分の担当している仕事で掘削中の横坑の天端が崩壊して、至急見に来てほしいと連絡が入った時でした。「見に来てほしいが、女性は入れないから、あなたではなく他の人に来てもらいたい。」という言葉を聞いた時に、ためらいもなく“実際に施工に携わって切羽の前面で作業をしている人の安全”的に、誰か現場に駆けつける人を探さなきゃ!!と、上司や周りの同僚に現場を見に行ってほしいと相談をして回りました。“女性は入れない”という現実に直面したらショックを受けるだろうと思っていたのに、その時の私は現場の安全を優先し、作業員の精神衛生を考

えたら私は行くべきではない、と自分の中で冷静に判断していたのです。土木の社会には、土木社会特有の文化や慣習があり、現場で働く人の中には、山の神様は女神様だから女性が来ると山神様が嫉妬して災害を起こすと信じている人が沢山います。だから、私が行けば現場の人が動搖して事故を起こすかもしれない、いつの間にか現場の安全を考えていたのです。そんな自分に気が付いた時、「技術屋思考になって来たかな？」と強く感じました。

でも私は、いつか女性も山の神様と仲良くなれる日が来ると信じています。山の神様が嫉妬深い神様ではなくなる時、その時は私たちが今よりも山をよく理解でき、大地の挙動をより的確に予測出来るようになった時、山の神様を怒らせずに自然と付き合う事が出来るような土木技術が私たちに備わった時なのではないでしょうか。そんな時代が早く来る為にも、自然とじっくり向かい合う地質技術者が必要なのだと思います。

私は、幼いころにカンボジアという国で内戦を経験しました。人が人を傷つけ殺し合う社会を見て、子供心にただただ悲しかった記憶があります。だから、「人が無知なために大地を必要以上に傷つけないように、そして大地によって人が傷つかないように」という想いがいつも私の中にあります。

また、子供の頃に公害や災害のニュースを聞くとよく「人はどうして自然を理解する知恵と、自然を思いやる良識を持てないのだろう？」と不思議に思っていた事を思い出し、今の仕事をしっかりとやらないと、子供の頃の自分にしかられそうな気がすることがあります。

ですから、これからも少しづつ経験と知識を深めて、もっともっと自然の姿を理解できる人になりたいと思います。

おばあさんになっても、地球を科学する気持ちを持ち続けていられたら、すてきだろうと思います。

